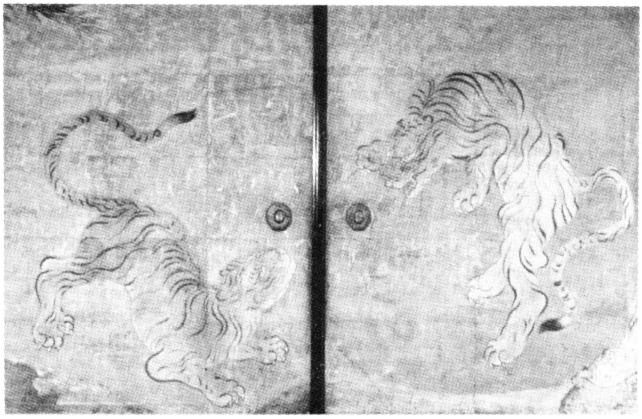
みかえり　第102号



竹虎図

天下和順　日月清明　風雨以時　災励不起
国豊民安　兵戈無用　崇徳興仁　務修礼譲

――無量寿経――

年頭にあたり平和祈念の回向文をかかげました。仏道を成ずれば「天下は平和になり、太陽も月も清く明らかに照らし風雨も時にかなってよろしく、災害や疫病は起らず、国は富み盛えて、民は平和安穏で、兵士や武器は用いることなく、人々は互いに徳を崇めて、仁を尊び、礼儀や謙譲の道を守るようになる」と説かれています。

この四十年間、日本は平和です。しかし世相はきびしく、世知辛い世の中だといいます。それは鉄の錆が鉄より生じて自らの身を害するごとく、私たちがきびしい社会にしているのではないでしょうか。

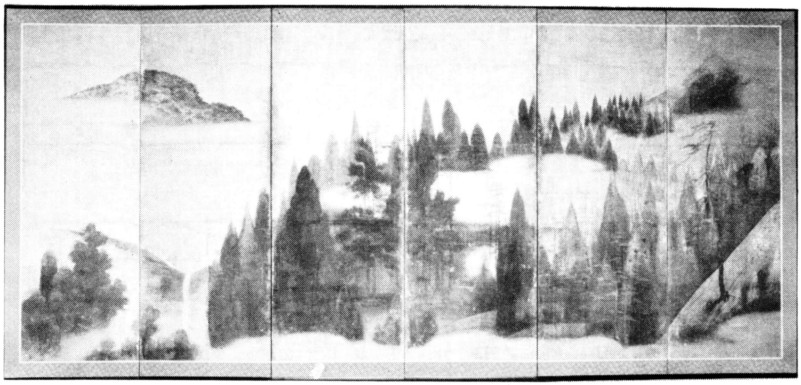
私たちは世渡りに急がしく立ちまわって、安楽な心持になるいとまがありません。

徒らに苦しんで欲に走り、互いに偽りあざむいて、心を労し身を痛めて、毒を飲み苦を食うような生活をしているのです。

今日の暗い世間を明らかな世間にする為、悪を除き善を修め仏道に励むことこそ一人一人が為さねばならない尊い修行なのです。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第103号



山　杉　図

慈悲とは佛心なり。
佛心と言ふは　哀愍衆生の心なり。

――西山上人『五段鈔』より――

〝ほとけさま〟について、私達はいろいろの思い入れをして、飾りたて、さまざまな意味を付属したがるものです。それは、あくまでも私達衆生の側の思い入れにすぎないものなんですね。

この西山上人のお言葉は、〝ほとけさま〟のおこころを、ずばり簡潔に言い表しています。慈悲＝仏心＝哀愍衆生と、イコールでつなげきってしまっているのです。

阿弥陀仏のおこころとは、私達衆生を、憐れみかなしみ、そして守りつづけていてくださる、そのおこころなのです。なにも、難しい理屈を知らずとも、ただひたすらに、そのあわれみと、おまもりをいただくだけのことです。

写真を撮るときのストロボは、光のあたる面だけしか照らしません。顔が明るければ、後ろは陰になっています。が、阿弥陀さまのあわれみと、おまもりの光は、私達をすっぽり包みこんで、陰の部分はありません。ふりそそぐ光明となって、わたしたちをいつくしみ、守り続けて下さっているのです。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第104号

小方丈「墨竹図」

久近（くごん）の夫妻（ふさい）　別體同心（べったいどうしん）なり

――善導大師――

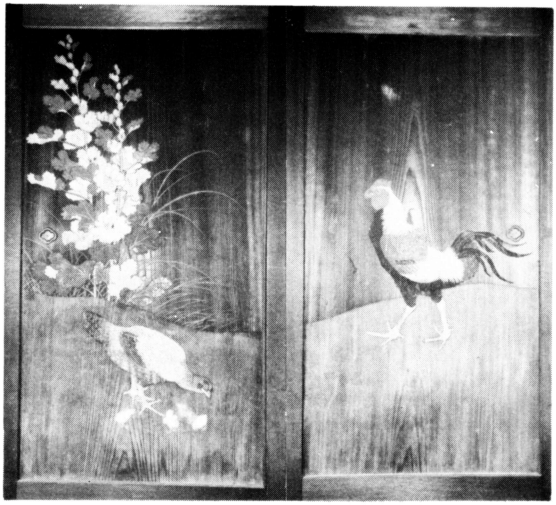
十人十色といわれるように、それぞれ顔形が異なります。同じように性格も境遇も異なります。だからこそ、それぞれに違った人生があるのですね。

それを同じ形にはめ込もうとしたり、あるいは親子・兄弟・夫婦・同窓・同信だから…と、自分と同じように考えたりはしていないでしょうか。そこに誤解を生じたり、人間関係に亀裂を起こしたり、果ては破綻をきたしたりしてしまいます。

「一心同体」という迷いに気づき、互いに相手を認め合う「別体同心」に努めたいものです。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第105号



小方丈杉戸「禽鳥図」

虚偽諂曲（てんごく）の心あることなく　和顔愛語（わげんあいご）して
（衆生の）意に先んじて承問す

（大　経）

テレビのコマーシャルに、子供の目の高さから街の交通と車の死角を撮ったのがある。また、王貞治監督が、白い目かくしと杖を持って横断歩道の前に立つ映像もあった。その子供の立つ位置と障害者の立場から見聞きする、ものの受けとり方と、運転者のエゴへの自戒を求めて、互いに規律ある交通社会へというのがテーマだったように思う。

うそ、いつわり、こび、へつらいの心を持たずに、各自各人がそれぞれの対立した立場や関係をのり越えて、相手の身になり、それも先んじて語り合うことができたなら、そこにはもう〝浄土〟があるばかりです。今、私から始める姿――如来から賜った命の実践者。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第106号

「勧学院」扁額

本願の名号には　佛の方よりぞ南無阿弥陀佛と一つに成じ　凡夫往生の佛とはなり給えり

――西山上人御法語――

念仏は〝他力の行〟と言われます。「念仏を称える者はだれであろうと、私は救わずにはおかない」と、阿弥陀仏はその本願に誓っておられるのですから、私どもは只々念仏を称えればいいのです。これが〝他力の行〟です。

だからと言って、「助けたまえ、阿弥陀仏！」という心で称えるならば、それは、仏の願に取り付こうとする〝自力の行〟となって、却って弥陀の本願に漏れることとなる――こう西山上人はおっしゃるのです。

仏道を修するには「行」は欠くことは出来ません。しかしながら、では仏道を修する行が私どもに出来るかと言えば、「自分には出来ぬ」と言われたのが師の法然上人なのです。

このような私どもが仏と出合えるのは、阿弥陀仏の方より私ども衆生を追って来て下さるからなのです。この謂われ＝大慈大悲を知って「かたじけなや」という心で称える、これが〝他力の行〟なのです。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第107号

木庵禅師「瑞紫」扁額

南無（なむ）といふは度我（どが）の義　我をわたし給（たま）へという心なり

――西山上人「女院御書」――

……テレビが映らない、ラジオがきこえない……

最近都市中心部は益々高層ビルが増えつづけている。それに伴うその狭間での苦情である。高層ビルが電波障害をおこすのである。どうすべきか。簡単なことである。高層ビルの屋上に共同アンテナを建てればよい。そうすればまた以前のようによく映り、きこえるようになる。　しかし、スイッチを入れないかぎり何も映らないしきこえない。

阿弥陀仏の摂取不捨の本願の電波はあらゆるところに交錯している。それを受けとめる私の心の中の受信機のスイッチが入っているかが問題だ。

☆度我（どが）＝迷いの此岸からさとりの彼岸に私を導き救うこと。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第108号

小方丈 牡丹孔雀図 原在明筆

ほほえみが
人を美しくする

法を聞くことを得るがゆえに
顔色和悦なり

――観無量寿経――

「泥かぶら」とよばれる少女がいました。自身の醜さゆえに、いつも暗く沈み、泣いてばかりいました。通りかかった旅人が、こうすれば美しくなれる、と三つのことを教えました。

その三つとは

一、いつもにっこり笑うこと
二、おのれの醜さを恥じないこと
三、他人の身になって思うこと

すなおにコツコツと実行した少女は、いつか村中で尊敬される美しい娘になった、ということです。

笑顔はその人自身を美しくし、まわりを明るくしていく大きな働きをするのです。

総本山 永観堂 禅林寺

みかえり　第109号

素直に言おう
ありがとう
すみません
ごくろうさま

桐に鳳凰図（小方丈襖絵）

声に唱へ出だす処は
我が往生の色が
声に出づるなり

――西山上人――

車で高速道路に入るとき、入口で通行券を受け取ります。その時係の人が

「おはようございます。どうぞ。」

「はい、気をつけて。」

「行ってらっしゃい。」

などと声をかけてくださいます。何かすがすがしく、気持よく運転ができそうです。

それが、ヌーと通行券をさし出されると、なんと気分の悪いことでしょう。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第110号

やさしさに出遇い
やさしさに気づく

大悲を興して　衆生を愍れみ
衆生を視そなわすこと自己のごとし
（無量壽経）

母から手紙が来た。

「はるばると親子四人連れでようこそ帰ってきて下さいました。七夕さまのように年に一度の出会いですが、こんなに嬉しいことはありません。……」

『母』。こんなに優しくて温かな言葉はない。母を想うとき、阿弥陀さまだと思う。母という字の二つの口は、慈悲と智恵だ。限りなく深い眼ざしと時には叱りの言葉をたたえた丸るい顔母の住む地は、なつかしいふるさと。

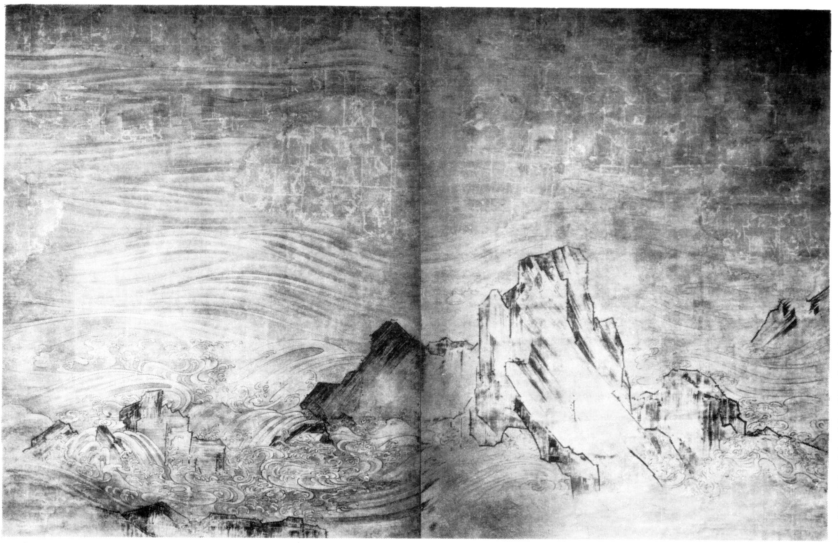
日々繰りかえし繰りかえし喚ぶ真実の声に気づかされ、一心にこたえる「はい」の返事。これは、「南無阿弥陀仏」の生活そのものではなかったのか。

開山眞紹僧都御尊像（開山堂安置）

昭和六十三年四月　三祖師一一〇〇年遠忌法要厳修

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり 第111号



長谷川等伯筆「波濤図」部分・重要文化財

あなたの寿命の計算法!?

仏法流布の世にうまれて　なんぞ
修行せずして　いたづらに帰りきたるや

――法然上人――

自分の寿命を計算できる方法をきいた。学者によって考え方はまちまちだそうだが。それは、自分の父親と母親の寿命、それにそのふた親のそれぞれの両親の合計六人の寿命の平均値に四年加えると一応の自分の寿命がでるという。

しかしこれはあくまでも話の上でのこと。私どもの生命の保証は今の一瞬だけです。だからこそ、ひと時も早くみ仏のねがいにめざめたいものです。

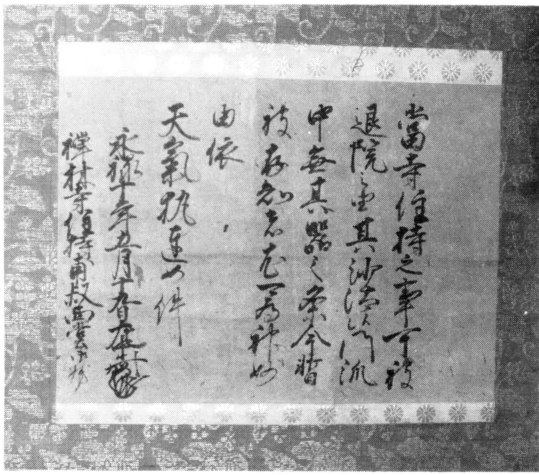
総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第112号

知らないうちから　包まれている

無量光仏　無辺光仏……超日月光仏

（無量寿経）



正親町天皇、甫叔上人に対しての退山御留めの綸旨
（特別寺宝展に展観中）

わたくしの回りをぐるっと思いかえしてみると、様々な才能を持っている人がいるものだと気づく。歌に秀れた人、書や絵画、園芸、漁、碁、料理などなど。それぞれの才能のなかで、その道の一隅を照らしながら、たゆみない日々の努力をされている。良き人のまわりにはそれぞれに暖かな集いがあり、前進がある。

仏の大慈悲とは、いったいどんなだろう。全てを照らして暖かくする。そこに集う人々の心の隅々にまで行きわたる大いなる才能――。

その大いなる〝はからい〟に気づかぬ愚かなわたしよ。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第113号

たった一言が　人をきずつける
たった一言が　人を勇気づける

和顔愛語（わげんあいご）

――無財の七施より――

永観堂禅林寺の梵鐘

人間というのは不思議なものでたとえば歯がいたい時の苦痛は、それはもう大変なものです。ところがいざ治ってみると、その痛みたるや思いだそうにも出来ません一方、言葉でうけた苦痛というのは、これは幾星霜をへても刻明に思い出すことが出来ますし、そのたびに怒りの炎が黒々と燃えさかります。

言葉は、吐いたとたんに消えると思うのは、発する側の見方であって、受けとめる側からすれば、石に穿（うが）つがごとく残るものなのですね。ここを心したいものです。

総本山　永観堂　禅林寺